

# ハタハタ資源対策協議会資料

水産振興センター

表1 漁獲可能量と漁獲実績の推移

年	沖合			沿岸			合計		
	配分枠	漁獲量	実績(%)	配分枠	漁獲量	実績(%)	可能量	漁獲量	実績(%)
平成7年	85	53.8	63.3	85	88.7	104.4	170	142.5	83.8
平成8年	110	86.1	78.3	110	157.2	142.9	220	243.3	110.6
平成9年	180	161.2	89.6	180	290.8	161.6	360	452.0	125.6
平成10年	300	178.4	59.5	300	436.8	145.6	600	615.2	102.5
平成11年	400	143.0	35.8	600	579.1	96.5	1,000	722.1	72.2
平成12年	400	265.7	66.4	600	901.8	150.3	1,000	1,167.5	116.7
平成13年	520	547.8	105.3	780	986.2	126.4	1,300	1,534.0	118.0
平成14年	680	380.1	55.9	1,020	1,570.1	153.9	1,700	1,950.2	114.7
平成15年	960	903.9	94.2	1,440	2,058.6	143.0	2,400	2,962.5	123.4
平成16年	1,000	787.7	78.8	1,500	2,348.7	156.6	2,500	3,136.4	125.5
平成17年	1,000	488.2	48.8	1,500	1,866.6	124.4	2,500	2,354.8	94.2

集計期間：平成9年以前は暦年、平成10年以降は9月～翌年6月

・配分枠に対して、沖合48.8%、沿岸124.4%、全体では94.2%の実績となった。

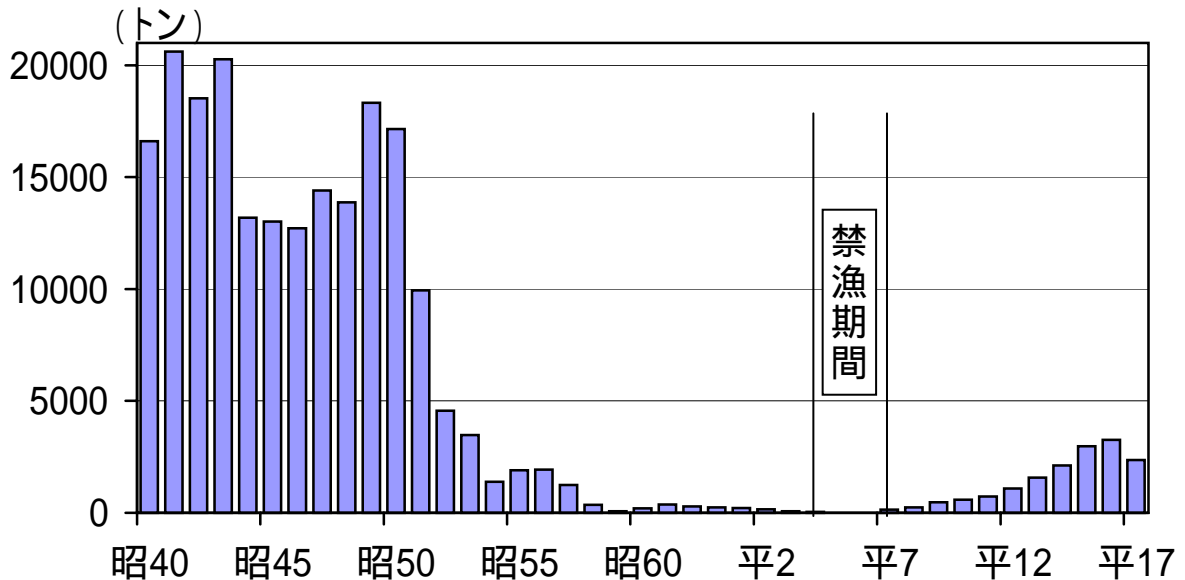


図1 秋田県ハタハタ漁獲量の推移

・昭和40年代は毎年1万トン以上の漁獲があったが、昭和51年以降急激に減少した。  
 ・解禁以降の漁獲量は、順調に増加してきたが、17年には初めて前年度を下回った。

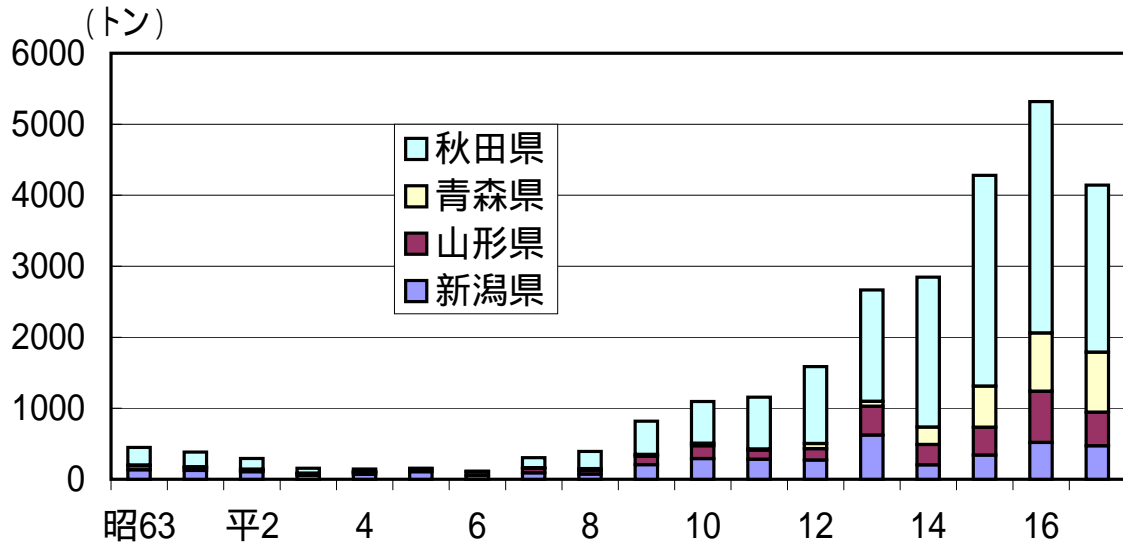


図2 日本海北部4県における漁獲量の推移

・日本海北部4県の漁獲量も、解禁以降は右肩上がりで増加してきたが、17年は前年と比べ、1,175t(22%)減少した。

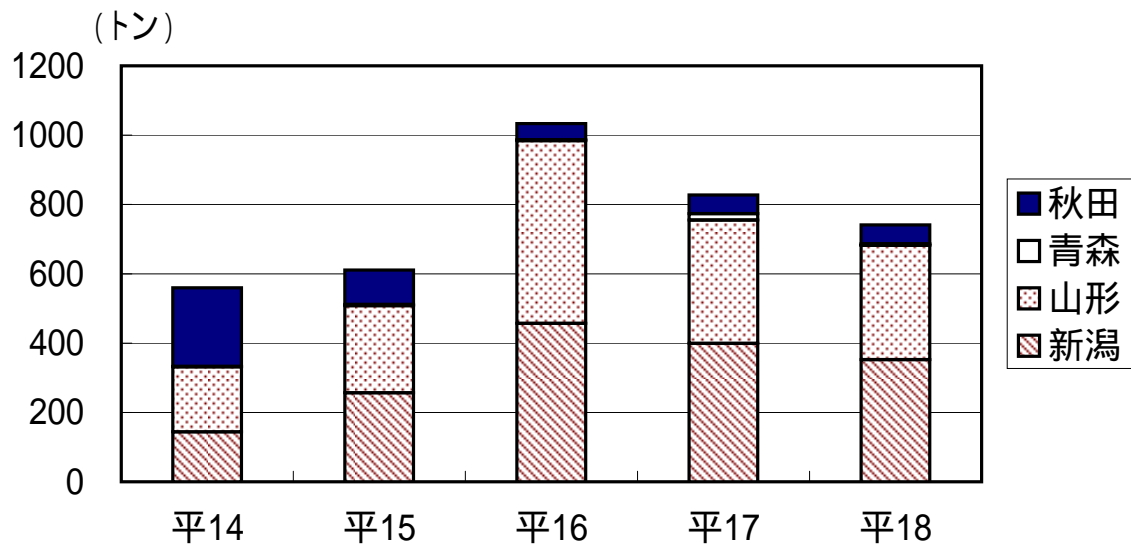


図3 1～6月における日本海北部4県底びき網漁獲量の推移

・秋田県は前年と同程度であったが、日本海北部全体では、平成16年以降減少傾向にある。

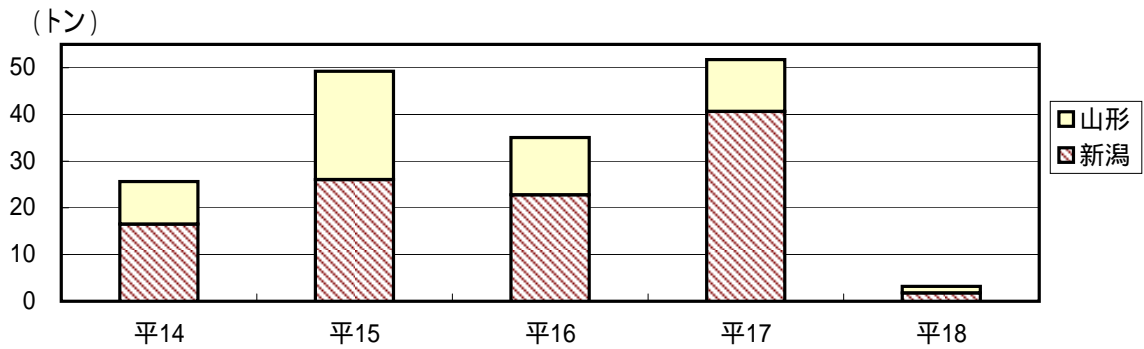


図4 山形、新潟における9月の底びき網漁獲量の推移  
 ・2県の総漁獲量は3.2トンで、前年の6.2%となっている。

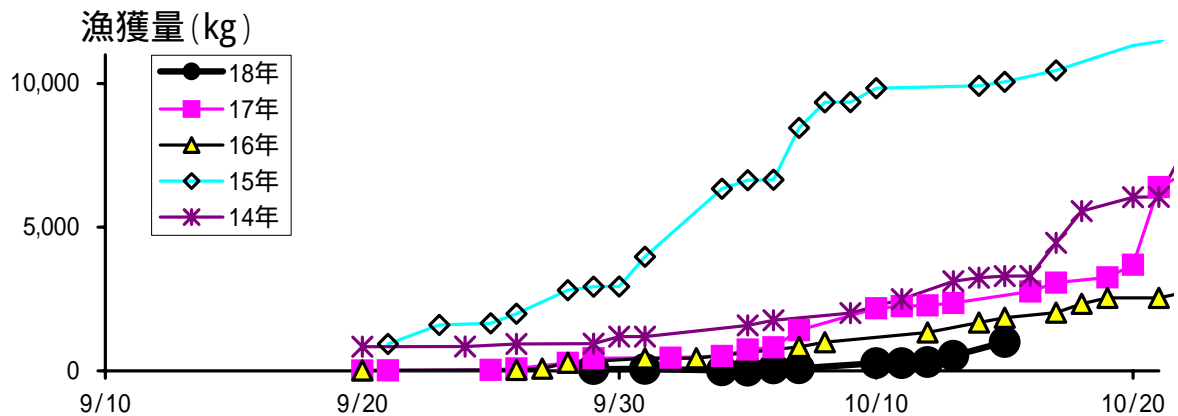


図5 秋田県における解禁日以降の日別累積漁獲量  
 ・本年は9月10日に解禁したが、初水揚げは9月29日で、64kgであった。  
 10月15日現在の総漁獲量は1,002kgとなっている。  
 ・解禁後約1カ月の総漁獲量を過去5年間で比較すると、本年の水準は低い。

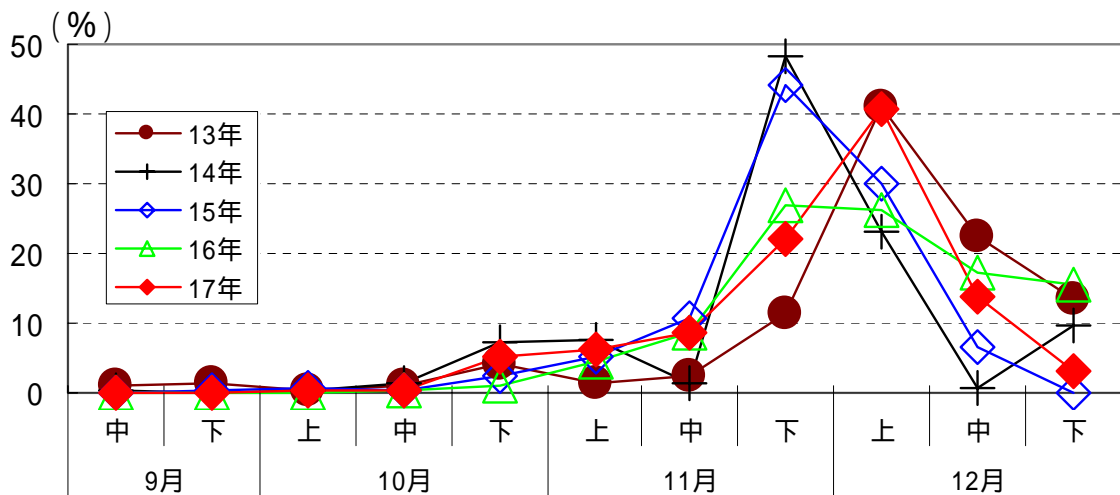


図6 沖合旬別漁獲割合の推移  
 ・近年、沖合のピークは早い年でも11月下旬で、沿岸と重なる年もある。

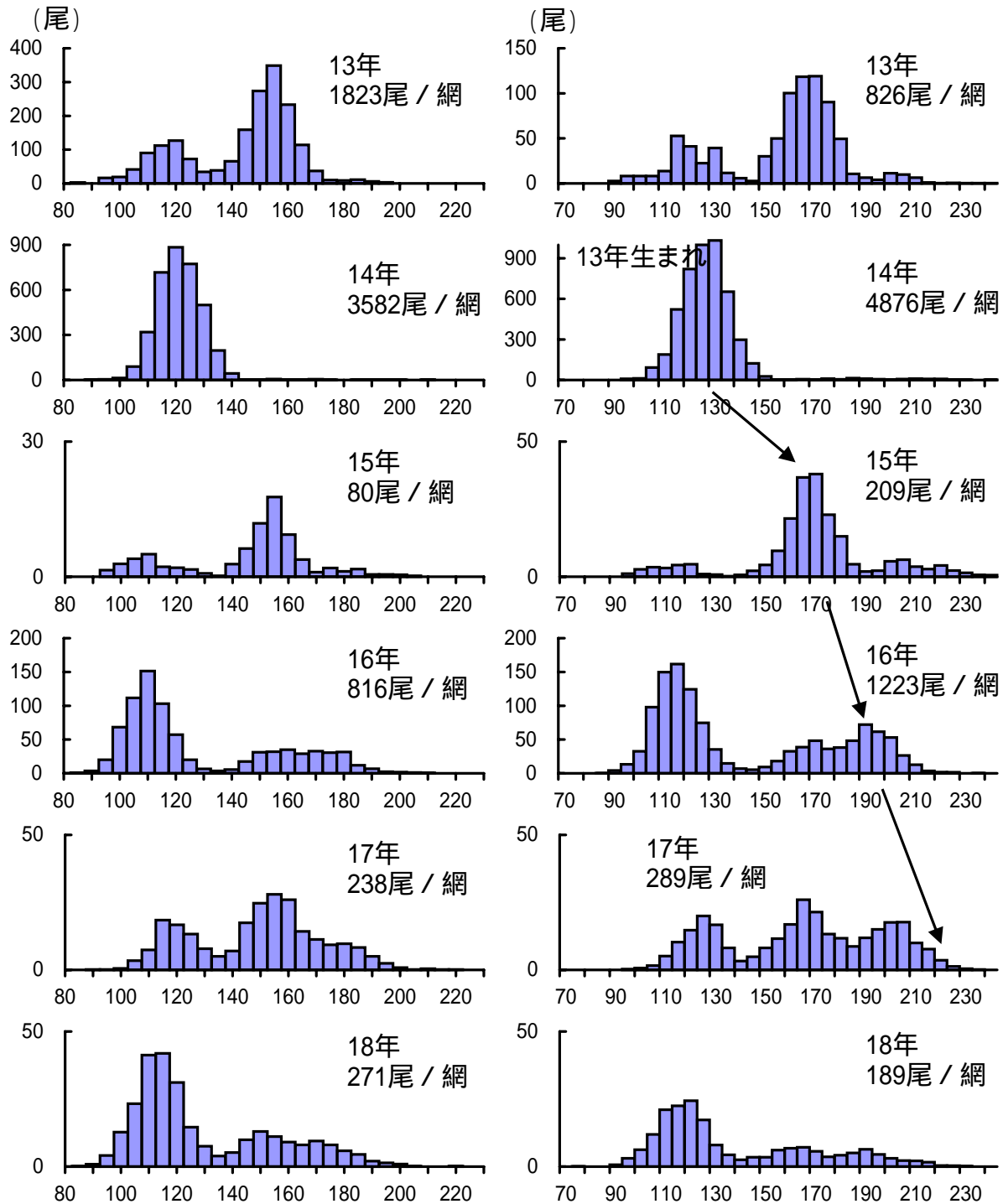


図7 5、6月の千秋丸底びき試験操業結果(1網当たりの入網尾数)  
 ・H13年生まれは非常に多く、14年に大量に加入した。特にメスでは16年まで資源を支えており、17年まで漁獲されていた。  
 ・本年は、各年齢とも多くはなく、13年生まれも認められない。

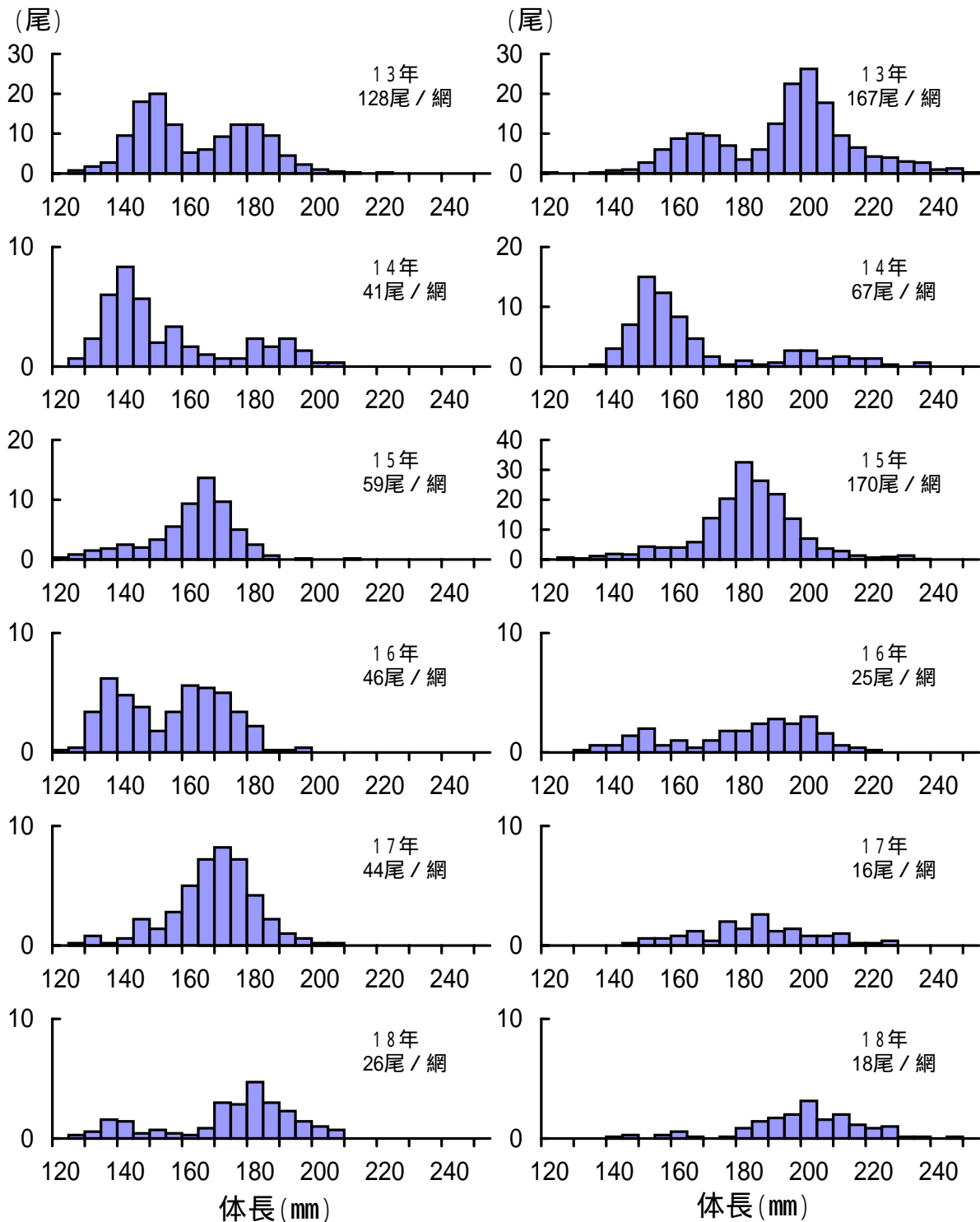


図8 10月の千秋丸底びき試験操業結果(1網当たりの入網尾数)  
 ・本年の一網当たりの入網尾数は低いレベルで、現段階では大型の4歳魚が主体となっている。  
 ・近年は、10月時点では漁場が形成されない傾向がある。

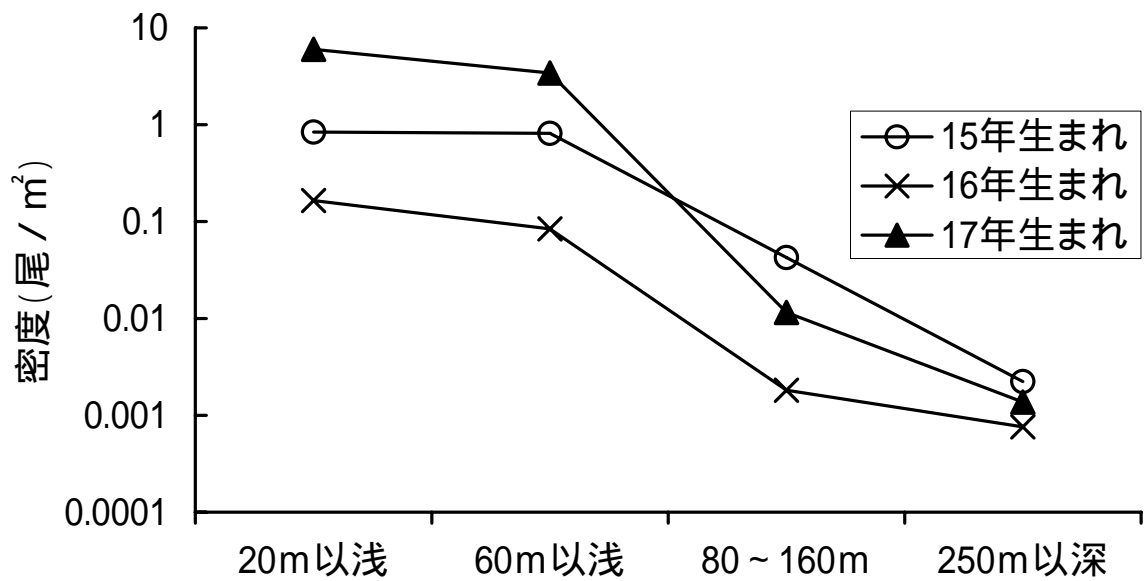


図9 ハタハタ稚魚発生量の比較

・17年生まれ(▲印)は、水深60m以浅では高レベルであったが、その後の減耗が大きかった。

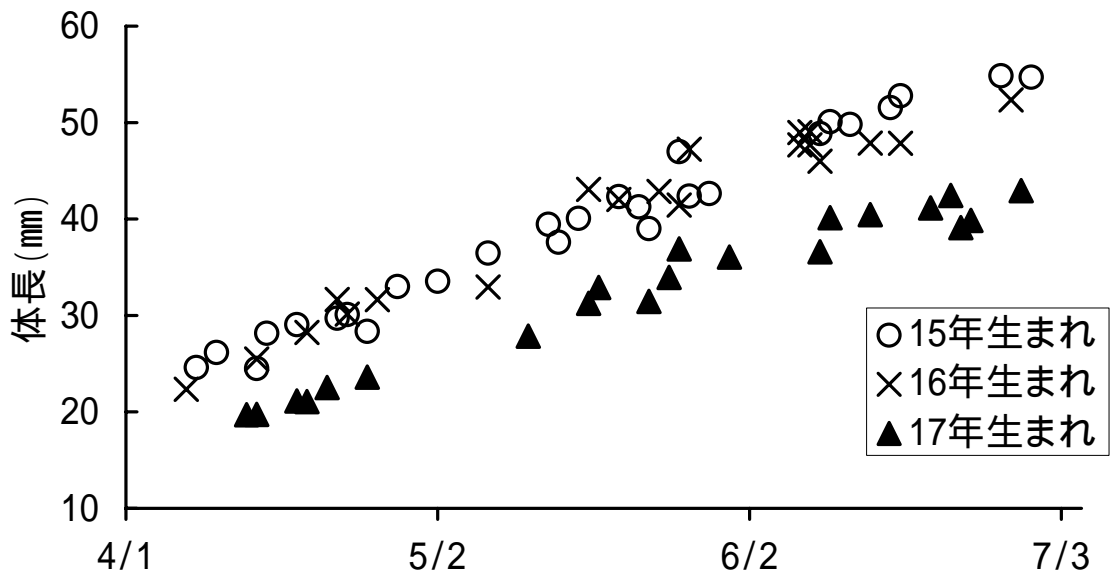


図10 ハタハタ稚魚成長速度の比較

・17年生まれは成長が悪く、これが減耗の一因であったと考えられる。

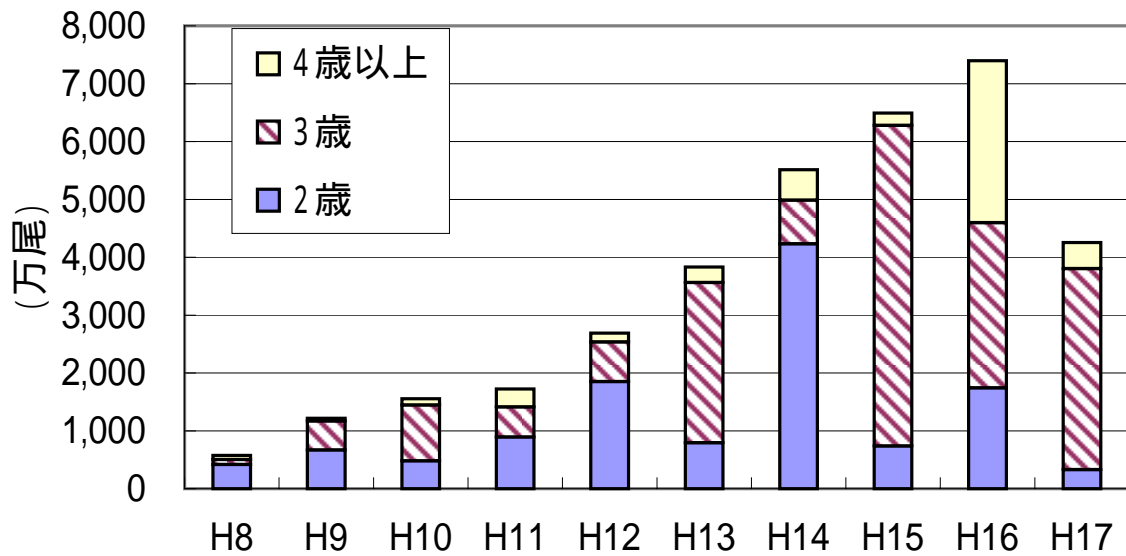


図11 日本海北部4県における年齢別漁獲尾数の推移  
 ・17年は、漁獲量が下がったことと、小型の2歳魚が少なく、3歳魚が主体となったことから、漁獲尾数が減少した。

### 漁獲対象資源量の推定

・18年漁期の資源は、昨年数多く接岸した3歳魚が4歳魚となった大型魚と、新たに加入する小型の2歳魚が混じった組成になると考えられる。

・新たに加入する17年生まれは、調査船による調査結果から、60m以浅に生息する時期には多かったが、成長が悪く、成魚になるまでに減耗したと考えられ、16年生まれよりは多いものの、その量は15年生まれの半分程度と推定された。

・解析の結果、秋田県の漁獲対象資源尾数は、2歳魚1千8百万尾、3歳魚8百万尾、4歳魚以上1千6百万尾の計4千2百万尾と推定され、資源量は約4,100トンと推察された。